

鉄 鋼 ニ ュ ー ズ

39年度の鉄鋼生産

鉄鋼連盟が発表した39年度(39年4月～40年3月)の生産速報によると、粗鋼生産量は4053万tとついに4千万tの大台を突破、前年度実績を19%、同連盟の39年当初見通しを9%近く上回った。このほか粗鋼別生産では転炉鋼の生産が急増、転炉鋼比率(全粗鋼生産量に占める転炉鋼の割合)が45.8%と前年度の39.4%を大幅に上回ったのが目立つた。

39年度の粗鋼生産がこのような伸びをみせたおもな原因としては(1)米国を中心とする海外輸出市場が好況だったため輸出が急速に伸びた(2)36年ごろ着工した新鋭設備が38,9年にかけ相次いで操業を始め、これら設備の操業度を維持し操業コストを低めるためには増産せざるを得なかつた(3)特に中堅メーカーでは昨年来の金融難で市況が悪化したにもかかわらず資金繰りのため増産を続けたところが少なくないなどが指摘されている。またこの間、転炉鋼比率が大幅にふえたのは高炉各社が生産コスト引き下げのねらいから、平炉より操業能率が高く操業コストの割安な転炉の利用度引上げに全力をあげたためである。その結果39年度の炉別生産実績も平炉鋼は1341万tと前年度比28.8%増にとどまつたのに対し、転炉鋼は1857万tで前年度比38.4%も急増している。

39年度の生産速報のあらましは次の通り。(単位千t, カッコ内は対前年度比)

○銑鉄 24,395(114.9%), ○粗鋼 40,528(118.9%),
○普通鋼熱間圧延鋼材 29,198(120.8%), ○特殊鋼熱間
圧延鋼材 2,528(102.9%) (4.10. 日本経済)

39年の特殊鋼輸出

鉄鋼連盟はこのほど39年(1～12月)の特殊鋼輸出実績をまとめた。それによると総輸出量は222,159t, 98,731,534ドルで、前年に比べて数量は25.8%減少したが、金額は13.4%増加して好調だった。これは前年よりソ連向け構造用鋼が減少した半面、ステンレス鋼、工具鋼など単価の高い鋼種の輸出量が増加したため金額は前年を上回ることにまつたもの。

輸出の内訳は、半成品が803t(前年比143.3%増)123,153ドル(同10.4%減)、二次製品が644t(同21.4%増)4,132,139ドル(29.1%増)、工具鋼は4,532t(同28.1%増)、1,130,890ドル(同17.8%増)、構造用鋼は58,604t(同62.7%減)7,267,680ドル(同60.2%減)パネ鋼が21,878t(同6.2%減)2,683,290ドル(同3.5%減)、ステンレス鋼が81,454t(同40.2%増)67,012,494ドル(同36.3%増)、その他鋼は48,431t(同6.7%減)16,184,596ドル(31.1%増)となつており、ステンレス鋼工具鋼が数量、金額とも増加しているのが目立っている。

仕向け先別では、数量ではソ連向けが59,165t(金額は8,666,511ドル)で1位、2位は米国の46,082t、3位はインド向けの22,839t(金額は8,655,224ドル)。

金額では米国向けの30,277,278ドルが1位で2位は中共の9,741,296ドル(数量は14,165t)、3位がソ連向けとなつており、金額で中共向けが2位となつているのが注目される。

州別輸出は次の通り。

○ア	シ	ア	58,775 t	27,595,793	ドル
○欧		州	81,690 t	21,348,137	ドル
○北		米	53,139 t	36,328,202	ドル
○南		米	14,408 t	6,036,402	ドル
○ア		フリカ	6,601 t	2,605,982	ドル
○オ		セアニア	7,546 t	4,817,018	ドル

(3.5. 日刊工業)

39年の鉄鋼原料輸入

鉄鋼連盟がまとめたところによると、39年1～12月の鉄鋼原料の輸入は9億4千万ドル～9億5千万ドルに上つたもようである。主要4原料でみると、鉄鉱石3110万t(前年比119.7%)鉄鋼用原料炭1113万t(118.4%)鉄くず510万t(111.1%)銑鉄335万t(216.1%)とそれぞれ大幅な輸入増となつている。ただ鉄鋼全体の外貨バランス面を見ると、39年は直接輸出だけで9億6千万ドルが見込まれるので約3億5千万ドルの間接輸出が黒字になるとしている。

鉄鉱石は38年全体の25.8%を占めたマラヤが21.3%と低下し、同様ゴアが年末の港湾ストで伸び悩んだ。したがって、同年はチリ、ペルーなど南米地域を中心としたスポット買いの増加が目立つた。金額的にはCIF4億2千万ドル(FOB3億4千万ドル)で、平均単価は38年の13ドル58に対し13ドル46とわずかながら低下した。

原料炭輸入の特徴は比較的距離な豪州炭が大幅な増加となつた(同年は400万tで、全体の36%一炭は528万t, 47.4%)、で金額的にはCIFで1億8千万ドル(FOB1億6千万ドル)と、前年よりも増えたが、単価は16ドル22から15ドル79と大幅な低下を見た。

銑鉄は前年の2.2倍におよぶ輸入増、当初計画が260万tであるところからみて驚異的な輸入となつている。これは鉄くずが当初計画600万tを下回つて510万t(FOB2億4千万ドル)の実績に落ち着いたことから明らかのように、鉄くずの肩代りの形をとつた傾向が強い。たとえば、単価も鉄くずが46ドル12に対し銑鉄が45ドル91と割安なことがあげられる。そのうち、中共銑鉄が100万と大幅にふえた(38年は8万t)ことが目立っている。(3.24. 日刊工業)

ソ連の鉄鋼生産

ソ連中央統計局の発表によれば、昨年(1964)のソ連の銑鉄、粗鋼生産は、1963年を6%上回つた。銑鉄は63年の5870万tに対し64年には6240万t、粗鋼は63年の8020万tから64年は8500万tにそれぞれ増加した。鉄鉱石の採掘量は前年の137百万tから64年の146百万tへ6%増加した。

圧延鋼完成品の生産も6%上昇して5740万tに達した。ただし63年の数量については発表されていない。半製品を含む圧延鋼の63年の数量数字は6240万tと発表されている。鋼管生産は1273百万mで、前年の1240百万mより2%の増加であった。(2. 10. 日刊工業)

八幡製鉄所出鋼1億tを達成

八幡製鉄所は、3月24日午前0時50分同所八幡製造所の第4製鋼工場4号平炉(120t)の出鋼で、創立以来63年4カ月目に待望の1億t出鋼という大記録を樹立したが、これを記念して同所は同日アドバラーなどを上げるとともに、第一製鋼工場第5号(150t)炉床で1億t記念出鋼式を挙行了。(3. 26. 鉄鋼新聞)

川崎千葉5号高炉火入れ

川崎製鉄千葉製鉄所は、3月15日午前10時から第5高炉の火入れ式を行なった。これは炉床径10m、炉内容積2142m³、最高1日出銹量4000tで、自由諸国内最高のものといわれる。この第5高炉の完成で同製鉄所は粗鋼生産能力として年間500万tの体制を完成し、銹鉄生産では年間427万tを目標にしている。

総工費約55億円で、昨年4月から川崎重工業、石川島播磨重工業などの施工で建設していたもので、溶銹炉形式はシャフト受けタイプ6本柱型、羽口数24本、炉頂挿入装置はジョンモアタイプ三重ベル式、高圧操業、重油吹込み、高温送風を特徴として、出銹量は平常で1日3600t、フル操業で最高4000t、年間能力130万tとなっている。

これまで同製鉄所の粗鋼生産能力は年間380万t、銹鉄年間約250万tで、銹鉄はこれまで年間約80万tを輸入銹鉄にたよっていたが、この完成ではほぼ自家生産に切り替えることになる。(3. 16. 日刊工業)

住金和歌山3号高炉火入れ

住友金属工業は第3次合理化計画第2期工事として進めていた和歌山製鉄所の第3号高炉および付帯設備を完成、4月1日午前11時から火入れを行なった。

同高炉は第2高炉と同じ1650m³の内容量だが、高圧操業の採用により1日当りの出銹量は3500tで、2日操業開始の160t3号転炉ならびに付帯設備などの完成により和歌山製鉄所の粗鋼生産実能力は年間450万tとなる。

所要資金は3号高炉90億円、3号転炉16億円、また高炉と関連した設備として、わが国初のSPミル(分塊厚板兼用)、コークス炉、焼結工場、自家発電装置、銹石・石炭ヤード、岸壁コンベヤーなども営業運転を開始した。(4. 2. 日刊工業)

日本鋼管福山製鉄所着工

日本鋼管は、3月2日福山市引野町の福山製鉄所建設現場に中島登二所長など関係者が出席、中島所長のクワ入れでコークス工場、分塊工場、熱延工場、冷延工場の各建設工事に着工した。この4工場はそれぞれ42年3月に完成するが、これが完成すると第1期工事のうち分塊圧延関係の工事が全部すむことになる。なお近く高炉、焼結機、転炉などの建設工事に着手する予定。

こんど建設に着手した4工場の概要は次のとおり、

((1) 工費 (2) 主な設備 (3) 面積)

コークス工場 (1)約40億円(2)94門1炉団(3)3300m²。

分塊工場 (1)約70億円(2)均熱炉3基、ユニバーサル・スラブ・ミル1基(年産150万t)(3)41,500m²。

熱延工場 約180億円(2)連続式加熱炉2基、80インチ全連続式ホットストリップミル1基、厚板精製ライン1系列、ホットランパーミル1系列、ホットシャーライン1系列(年産150万t)(3)56,600m²。

冷延工場 (1)約120億円、(2)酸洗ライン1系列、80インチコールドタンデムミル1基(年産48万t)(3)41,000m²。(3. 3. 日刊工業)

富士鉄大分製鉄所の計画

富士製鉄はかねて構想を進めていた大分製鉄所(鶴島)の建設を43年度から開始、45年度末には鉄鋼一貫の第1期工事を完了させる方針である。この計画に基づいて傍系の東海製鉄は42年度完了する第2期計画をもつて一応打切る予定である。

東海製鉄の第2期工事計画は40年度内に2号高炉、3号転炉1基、コールド・ストリップミルの新設が予定され、これが完了すると年間粗鋼生産は300万tとなる。もともと同製鉄所は高炉4基で年間粗鋼600万t案が最終目標とされていたものであるが、一方地元大分県の強い誘致意向もあつてこのほどの長期計画案でこれを改定、東海製鉄は高炉2基、年間300万tの段階でこれを一応打切ることになったもの。新大分製鉄所の第1期工事は1号高炉と転炉2基および大形新設を計画。

(3. 3. 日刊工業)

有明製鉄の海綿鉄利用試験

八幡製鉄所は5月から東田第6高炉(日産公称650t)で有明製鉄の海綿鉄約6千tを利用した第2回目の製鉄テスト操業を実施する。

第1回目は今年2~3月にかけてテストを行なった結果すこぶる好調な成果を示した模様で、コークス比は下がるほか、出銹率は高く、炉前原価などメリットなどについて若干問題が残っている意向だが、さらにこんども細かく実用化できるようテストを行なうもので、すでにわが国では鋼管が輸入して採用を計画、国内では八幡が初めてのものである。

この海綿鉄は八幡製鉄所戸畑転炉工場から発生する酸化鉄粉(鉄分64~5%)月約2千tを現在系列の有明製鉄熊本製造所に供給、ここで高炉から排出された高炉灰とともにロータリーキルン(月1万t能力)で半還元、これを八幡に逆輸送して銹石とともに高炉原料として使用するもので、八幡の酸化鉄粉、ガス灰の有効利用とともに有明製鉄の体質強化ともなり期待されている。

一方、有明製鉄熊本製造所は現在ロータリーキルン、電気製銹炉3基、コリカル炉、連続銹機など設備を有し、八幡からの酸化鉄粉をはじめ砂鉄などから型銹月約2千tを生産、全量八幡に納入しているが、こんどの海綿鉄生産から酸化鉄粉、高炉灰をキルンで半還元、こんど5月のテスト用として海綿鉄の供給を行なっている。

(4. 19. 日刊工業)